王安石

中國詩人選

王　安　石

清水　茂注

編集・校閲
吉川幸次郎
小川環樹

中國詩人選集二集4

中国詩人選集二集　第四巻　王安石

一九六二年五月二二日　第一刷発行©
一九七七年三月一〇日　第五刷発行

定価六五〇円

注者　清水茂

発行者　岩波雄二郎

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社　岩波書店
電話 〇三―二六五―四一一一
振替 東京六―二六二四〇

印刷・精興社　製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説

I

独り帰る……五
郊行……七
山田久しく拆けんと欲っす……八
詔書を読む　慶暦七年……一一
河北の民……一四
廩を発く……一六
兼并……二三
塩を収む……二六

II

明妃曲二首（其の一）……三五
（其の二）……四〇
桃源行……四三
孟子……四八
商鞅……五〇
相州の古瓦の硯……五一
謝安墩二首　一を録す（其の一）……五三
東門……五四
純甫　釈恵崇の画を出だして予に要めて詩を作らしむ……五八
桂枝香……六四

Ⅲ

散髪一扁舟……七一
江上……七二
秣陵道中口占二首　一を録す（其の二）……七三
烏塘……七四
夜直……七六
船を瓜洲に泊す……七七
江寧夾口三首　一を録す（其の三）……七八
州橋……八〇
初夏即事……八一
金陵即事三首（其の一）……八二
（其の二）……八三
（其の三）……八五
鍾山即事……八六
鍾山の晩歩……八七
北山……八八
悟真院……九〇
湖陰先生の壁に書す二首　一を録す
（其の一）……九一
午枕……九二
郊に出ず……九四
即事……九五
北山より暮べに帰り道人に示す……九七
白土村より北寺に入る二首（其の一）……九八
（其の二）……一〇〇
半山春晩即事……一〇一
葛渓駅……一〇三
平甫の金山に会宿し親友に寄するに次韻す……一〇五
舎弟の賞心亭即事に次韻す二首　一を録す
（其の一）……一〇七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

宝公塔に登る……一〇九
IV
憶昨の詩　諸外弟に示す……一一五
任村の馬鋪に書す……一一三
耿天隲と会いて話す……一一三
鄞県の西亭……一一四
明州の図を観る……一一六
江上……一一七
姑胥郭……一一九
長安君に示す……一一一
呉氏の女子に寄す……一一二
和甫を送って竜安に至り微雨因って呉氏の女子に寄す……一一五
杭州望湖楼より回り馬上にて作り玉汝楽道に呈す……一一五
何氏の宅の壁に書す……一一四
曾子固に寄す……一一五
王逢原を思う……一一七
V
寒山拾得に擬す二十首　二を録す
（其の二）……一一七
（其の四）……一一九
半山寺の壁に題す二首（其の一）……一一一
（其の二）……一一二
相国寺にて同天節の道場に啓し行香院に戯者を観る……一一三
自ずから遣る……一一五
重将……一一六
吾が心……一一七
新花……一一九

年譜……一八三
略図

解説

一

王安石（一〇二一―一〇八六）の名はたいへん高い。東洋史の概説書で、北宋時代、かれが神宗皇帝（一〇六七―一〇八五在位）のもと、当時の窮乏した政府財政を建て直し、軍隊を精鋭化し、人民の生活を向上させるため、政治の改革をやってのけ、そのため保守派の政治家たちから攻撃されて、北宋末年の新党旧党両派の抗争のきっかけを作ったことを記さないものはないであろう。

王安石は、政治家として、あまりにもすぐれていたため、文学者としての名声が、すくなくとも近頃の日本では、政治家としての名声におおわれてしまっているように思われる。それは、あたかも、ウィンストン・チャーチルが、一九五三年度ノーベル文学賞の受賞者としてであるよりも、第二次世界大戦に英連邦をひきいて、枢軸国と戦ったことの方が、はるかに有名であるのに似ている。とはいうものの、王安石が、散文の方面で、唐宋八大家のひとりであることは、今なお忘れられてはいないことであろう。同様に、詩の方面でも、中国では、後世保守派によって伝えられたかずかずの悪評にかかわらず、無視することができないほど、すぐれた作品をのこし、王安石ぎらいの清朝人をして、「人を以て言を廃せず」の歎きを発せしめた。この書物では、政治家としての王安石でなく、詩人としての王安石の姿を示そうと思う。

二

しかしながら、王安石の政治家としての行動や抱負と、かれの文学者としての創作と、まったく背反するものではない。かれの詩文のなかには、かれの政治家としての行動を支えた思想が充満している。

白居易は、みずからの古体詩を、諷諭、閑適、感傷の三類に分けた（一集「白居易」上八ページ以下参照）。これは白居易自身の古体詩だけでなく、杜甫以後の詩人は、どの部分に重点をおくかのちがいはあっても、だれでも、いく分かずつこの三類の性格を持つ詩を作っており、王安石もまたそうである。

この書物で、わたしは、王安石の詩を五つの部分に分けたが、白居易の分類にしたがえば、第一、第二は、諷諭、第三は、閑適、第四、第五は、感傷といえるであろう。

第一の分類は、政治家王安石が、社会の苦しみに目を向け、人民のために政治をする積極精神をあらわした作品で、多くは、比較的わかい時期のものであると思われる。

かれは、たとえひとりの人民の生活にかかわることでも無視できないと考えた。「塩を収む」の詩にはいう、

一民の生　天下に重し
君子与に秋毫を争うに忍びんや（二九ページ）

と。そして、貧しい人たち、気の毒な人たちをすくうためには、金持ちの倉を解放せよとまでいう。「廩を発く」の詩にはいう、

駕して言れ富蔵を発き
云う以て鰥惸を救うと（一九ページ）

と。これらの句には、人民を救おうという熱意が率直に出ている。そして、それらの詩は、いずれも人民の生活の苦しみを直視するところから生まれる。かれは「河北の民」（一四ページ）の苦しみをうったえた。それはどんな苦しみであったか。一つには、外国との屈辱的条約の結果によって強制された上納。

家家子を養って耕織を学ばしめ
官家に輸り与えて夷狄に事えしむ

苦しみはそれだけではなかった。二つには、ひでり、更に三つめには、政府の労役があった。

今年の大旱　千里赤く
州県仍お催がす河役を給せんことを

このような苦しみから人民を救済するには、対外的には、軍備の強化、対内的には、人民の租税や労役負担を軽減するのが第一である。かれの新法は、この二つを目的とするもので、たとえば、国民皆兵を目標とする保甲法や、馬匹育成の保馬法などは、前者の目的にそうものであり、労役のかわりに金銭を出して、労役者をやとうようにした募役法などは、後者を目的とした。これらの詩は、かれが少壮の時期、いかに人民の味方であったかを示すばかりでなく、政治家としてのかれの施策が、実に早年よりいだいていた抱負の実現であることを示す。中国の詩人で、白居易やその友人元稹など、わかいころ、人民の味方として、当路のものを攻撃したものは多い。けれども、かれらの大部分は、一旦政治の要衝に立ったとき、わかいころの情熱は、すでに世路の艱難にすりへらされ、保守派のなかまに投じて、かつては攻撃した因襲

をそのまま受けついで行く。王安石は、宰相となったとき、かれの抱きつづけた理想を実現にうつそうとした。かれの偉大さは、ここにある。更にかれの施策が運用者の不正によって弊害が生まれ、十分理想どおりにゆかず、公私の事情がからんで隠退してからも、この書物の巻頭にのせた「独り帰る」の詩(五ページ)に見えるように、人民の労働の苦しみへの思いやりを忘れなかった。これは、年を取るにしたがい、人民を忘れはてる詩人が多いなかに、とりわけ目立つとうとい心持ちである。

第二の分類は、「詠史」というべき、むかしの史実の批評にかりて、自己の主張を述べようとするものである。王安石は、このなかで、過去の歴史事実に対して、新しい見方を提出し、時には、従来の通説とまるっきり反対に、価値の顚倒をさえ試みた。法治主義に徹底した戦国時代の秦の国の宰相商鞅は、儒家から仁に欠けるものとして批判されるのであるが、かれは、「商鞅」の詩を作って、

今人未だ商鞅を非るべからず

商鞅は能く政をして必ず行なわれしめたり(五〇ページ)

と商鞅を弁護し、漢と匈奴との政略結婚の犠牲になった王昭君について、匈奴での生活を不幸とするふつうの見方に、ある部分は、そいつつも、匈奴にいることが不幸だとはかぎらないというニュアンスを持たせることもある。「明妃曲」第二首の、

漢恩は自のずから浅く胡は自のずから深し
人生楽しきは相知の心に在り(四一ページ)

ということばには、人類を同一視して、人間のまごころを重んじたことがうかがえ、その句が祖国愛に欠けるものとして非難されたことは、かえって、かれの心情の博大さを示すともいえるであろう。そのほか、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

この第二類には、「東門」の詩(五四ページ)における李白への追慕のように、古人に対する思慕の情を述べたものもある。王安石は、韓愈の古代趣味とは別の意味で、理想を古代においていた。新法にしても、ただ「新」であるばかりでなく、王安石が好み、みずから注釈さえ加えたことがある「周礼」の制度の復帰という気持ちがある。かれの散文でも儒家的立ち場に立っての古代復興の心持ちを述べた文章があるが、詩でも、「孟子」(四八ページ)や「桃源行」(四三ページ)には、そうした精神があらわれている。

第三の閑適の詩は、おそらく大部分が、熙寧九年(一〇七六)南京へ引退してからの作品であろう。この詩のなかには、人間の生活の戦いは出て来ない。閑適の詩は、一般に、諷諭精神のうらがえし、つまり、政治や社会への関与することに失敗したはての挫折の意識、あるいは人間を嫌悪したすえの自然への没入と見られるが、王安石には、朝廷で宰相として自分の力を十分に尽くして社会に奉仕したあげく、引退して得たやすらぎとともに、いままで自己の趣味をおしころして社会にささげていたのを、こんどは、自分の趣味に生きようという積極的な美の追求をも、見なければならない。これらの詩は、かれをすみ切った美の世界に遊ばせているようである。かれの同郷の後輩で、その教えを受けたこともある黄山谷(庭堅、一〇四五―一一〇五)が「荊公(すなわち王安石)の詩、暮年方に妙」といい、無名氏の「漫叟詩話」に「荊公の定林後の詩は、精深華妙、少きころの作の比に非ず。」というように、かれの詩の芸術的完成は、これらに見られる。王安石の詩のなかで、言語の使用という面で、きわ立ってすぐれているのは、これらの詩であるが、それはあとで再びふれるであろう。

第四類は、王安石個人の経歴に関係したり、親戚朋友に与えた詩である。この類さいしょの「憶昨の詩」(一一五ページ)は、かれの幼少時代の追憶で、その精神的成長のあとをたどる材料となる。この詩で、王

安石は、わかかりしころのかれの自信と理想を述べては、

材疎そかに命賤しきも自ずから揣らず
稷契と遐かに相い希わんと欲っす

といい、そして、勉学にはげんだきびしい生活を、

図書を吟哦して慶弔を謝し
坐室寂寞　伊威を生ず

と述べる。かれの詩にあらわれる言語の充実して過不足なき使用は、こうした学習の成果の上にきずき上げられたのではなかったろうか。けれども、「人の情に近からず」と評された青年時代の一面が、かれの本質ではない。王安石は、一方やさしい心の持ち主であった。「長安君に示す」(一四一ページ)の詩では、すでに嫁して人妻となった妹にもやさしい兄であり、「呉氏の女子に寄す」(一四二ページ)の詩では、もうかのじょが生んだ外孫が任官しているほど大きくなったむすめに対してもやさしくいたわる父であったことを示している。そして、また、友情にあつく、志を同じくする人人へは、おしみなく心をあけはなった。曾鞏や王令に対していだいていた尊敬と友情は、この書物に収めた「曾子固に寄す」(一五五ページ)「王逢原を思う」(一五七ページ)の二つの詩によく示されるであろう。これら、親戚や友人に与えた詩からにじみ出る王安石の心情が、世に伝えられるような意地っぱり一方のものでないことはあきらかであろう。

第五部分は、仏教に関係したものや、最晩年の心中了悟したところのあるような詩をあつめた。王安石は、南京半山にある自分の邸宅を、そのまま寄進して仏寺にしたほどの仏教信者であり、かつ仏教思想をよくおのれのものとして消化していたようである。「寒山拾得に擬す」の詩は、かれの仏教に対する考え

方の告白といえよう。そこで、かれは、悪事でさえ、別のなにかのきっかけで生ずるもので、悪事をはたらいたものの罪でないと説く。すなわち、

衆生　衆悪を造るも
亦た一機の抽く有り（一六九ページ）

というのである。更に、かれは、衆生即仏の考えにまで達する。「半山寺の壁に題す」の詩に、

衆生は仏に異ならず
仏は即ち是れ衆生なり（一七三ページ）

とあるが、これは、すべての人間が仏になり得ることをいうのであり、発展して、だれでも平等だという考えにまで達する。これは、上述の「一民の生天下に重し」といい、「明妃曲」に見える漢も匈奴も同じく人類だという考え方に通ずる。こうした平等観は、人間相互間の階級的区別に対して率直な疑問を投げかける。「相国寺にて同天節の道場に啓し、行香院に戯者を観る」の詩に、

侏優は戯場の中にして
一たび貴く復た一たびは賤し
心に知る本自ずから同じきを
欣びと怨みの無き所以なり（一七三ページ）

というのは、俳優を借りて栄辱のくだらなさを述べたものである。そして、かれは、死を前にして、「故き吾れ」を、かれ自身忘れてしまおうとした（一八〇ページ「新花」の詩）けれども、後世のひとたちは、この偉大な政治家にして文学者なる王安石を忘却のかなたに押しやることはできず、また将来も忘却しよう

としないであろう。

三

王安石が編さんした書物に、「唐百家詩選」というのがある。序文によれば、かれが宋次道（すなわち宋敏求、一〇一九―一〇七九）の家に伝わる唐人の詩集百余編から、その精なるものを選んだものである。かれは、このように唐詩を多く読み、精しく読んだことによって、作詩の栄養を得た。たとえば、「東門」（五四ページ）の詩における李白への景慕、「白土村より北寺に入る」二首（九八ページ）における王維的世界の構成など、いちじるしく唐詩の影響が見え、この書物に収めなかった「杜甫の画像」（臨川集巻九）の詩は、杜甫への傾倒を示す。そのほかにも、韓愈や白居易によって顕著な詩語とされた語彙が、頻繁に使用される。唐詩以外では、「即事」（九五ページ）の詩などに見られるように、陶淵明から受けた影響が大きい。

南宋の楊万里（一一二七―一二〇六）が、絶句では、晩唐の詩人と王安石がいちばんだというように、王安石は、おびただしい宋の詩人のなかでも、めだって絶句にすぐれる。たとえば、「江寧夾口」の詩にはいう、

帆を江口に落とせば月黄昏
小店灯無く門を閉ざさんと欲っす
側に岸沙より出でて楓は半ば死し

船を繋ぐに猶去年の痕有り（七九ページ）

たそがれの月、あかりのない早く戸をしめようとしているやどや、――多分旅客がないのであろう――、半分枯れたかえで、そうした旅のさびしさをそそる景物のなかで、去年のたびのあとがのこっている、それは、旅人のすくないこと、そしてあたりの変化のないこと、またこうしたすべてつめたさを感ずるたびのなかで、何かあたたかいしたしみを感ずるものであろう。こうした風景の設定は、旅情ととけこんで、美しい抒情小曲を奏するかのようである。王安石は、又、絶句以外でも、しばしば、美しいムードをかもす対句を造り出す。「姑胥郭」の詩の第三、四句

千家の漁火　秋風の市
一葉の帰舟　暮雨の湾（一三九ページ）

という叙景は、晩唐の詩人、杜牧（八〇三―八五三）の「宣州開元寺の水閣に題す」の詩のなかの

深秋の簾幕　千家の雨
落日の楼台　一笛の風

におとらぬ美しい描写であろう。王安石のこれらの美への沈潜は、晩唐の詩人から得たもののように思われる。

王安石の博学は、過去の文学作品ばかりでなく、諸子百家から、難経、素問、本草などの医学薬学書、種種の随筆に至るまで、あらゆる書物にわたっていた。かれの詩のなかにも、それらの書物から得た知識が混在している。また、王安石の仏教への興味と信仰は、仏典をも詩に利用させたことはいうまでもなく、仏教思想を述べた詩についてはすでにふれた。そのほかの仏典の使用の例をあげれば、「純甫、釈恵崇の

画を出だして予に要めて詩を作らしむ」の詩に、

頗ぶる疑がう道人の三昧力に
異域の山川能く断取し
方諸もて水を承けて幻薬を調え
生綃に洒落して寒暑を変ぜしかと（五八ページ）

という。ここでは、かれは、維摩詰居士が三万二千の諸仏を方丈の室に勧請したごとく、仏教的幻想の世界を、詩中に導入している。

だが、王安石の詩の言語は、多くの来源から来るものを、一つのるつぼにとかしこんだところにだけ、その特色があるのではない。すでに典故として、ある固定したイメージのあることばに、更に新たな色あいを加えて使用するところに、王安石のたくみさがある。かれのこうした典故使用のもっとも有名な例は、「湖陰先生の壁に書す」の詩の

一水田を護って緑を将って繞らし
両山闥を排して青を送って来たる（九一ページ）

の二句である。前句の「田を護る」ということばは、護田校尉という漢代の官名から来、後句の「闥を排す」は、漢初の武臣樊噲の行為として特に記憶されていることばを使用した。対となったことばが、どちらも漢代のものがたりから出るというつりあいがあるとともに、自然の景物の状態を表現するのに、人事のなかでもことに人間くささの強い官名に由来する「護田」とか、あらあらしい人間の所行として意識される「排闥」を、思い切って使用したところに、この対句の新しさがある。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com